

G・シュメルダース

財 政 政 策

〔第 三 版〕

山	口	忠	夫	訳
中	村	英	雄	
里	中	恆	志	
平	井	源	治	

中央大学出版部

訳者紹介

山口 忠 夫 (中央大学名誉教授)

中 村 英 雄 (成城大学教授)

里 中 恒 志 (駒沢大学教授)

平 井 源 治 (久留米大学助教授)

財 政 政 策 [第 3 版]

昭和 56 年 5 月 1 日 初版第 1 刷印刷

定価 10,000円

昭和 56 年 5 月 10 日 初版第 1 刷発行

訳 者 山 口 忠 夫
中 村 英 雄
里 中 恒 志
平 井 源 治

発 行 者 佐 野 幸 作

東京都八王子市東中野 742-1

発行所 中央大学出版部

電話 0426 (74) 2351 振替東京 8-8154番

© 1981 山口忠夫 中村英雄
里中恒志 平井源治

清水印刷/手塚製本

3033-040231-4632

訳者まえがき

本書は一九四〇年にケルン大学に迎えられて以来、今日に至るまで多年の間、西独の学界で指導的地位を保ち、学問上ならびに実践的世界に対して多大の影響をおよぼしたギュンター・シュメルダース博士の名著『財政政策』第三版 (Prof. Dr. Dr. h. c. Günter Schmolders, Finanzpolitik, Dritte, neu überarbeitete Auflage, Springer-Verlag Berlin・Heidelberg・New York 1970) の全訳である。原著は『法学・国家学全書』(Enzyklopädie der Rechts- und Staatswissenschaft) 中の一卷として書かれたものである。

この『財政政策』の結構および特色については、原書第一版、第二版および第三版の序言、それから第一版の訳書(東洋経済新報社刊、昭和三年十二月)に対するシュメルダース教授の日本版への序、ならびにこの第三版の訳書に寄せられた日本版への序文によって、その大体を知ることができよう。さらにまた共訳者である中村英雄教授によって書かれた詳細な解説は本書の価値を充分に伝えることと思う。それで、以下本文に入る前に、上記の原著における序言、日本版に対する序文および解説を掲げるが、本書を評価していただくのに都合のよいように配列しておいた。なお、本訳書刊行に至るまでの事情については、本文の後ににつづく『訳者あとがき』によって承知されたい。

一九八〇年秋

第三版 日本版への序文

拙著『財政政策』の初版は、幸いにも日本語に翻訳されて多くの人々に読んでいただくことができたし（山口忠夫訳『財政政策』、東洋経済新報社、一九五七年）、それに新たに改訂を加えたこの第三版も、今またこうして日本版をだしていただけることになった。これはすべて、畏友山口忠夫教授のお骨折りによるものであって、教授が本書の新旧二つの版を翻訳するために、長年にわたって多大の労をとられたことに対して、衷心から謝意を表したい。

この第三版を日本語にするために払われた労苦はとくに大きかったはずである。考えてみると、本書の初版は、財政学という枠の中で『財政政策』を独自の教材および講義範囲とする教科書の伝統を初めて樹立したものであった。そして、その伝統がその後もひきつづき受け継がれて、さらにいつそう発展せしめられ、それに伴って理論上の観点も否応なしにはつきり前面にあらわれてきた。そこで、この新版では、それらの問題と取り組まなければならなかったのである。しかし、本文の叙述をむやみに煩雑にしないために、その点に関する説明は大部分これを脚注（本書では各章末の注）にまわしてある。

初版のときから著者がいつも重視してきたのは、公共財政の歴史と公共財政の諸問題ならびに財政政策上の諸制度の展開の歴史である。それゆえ、本書と同じ趣旨で書かれた拙著『貨幣政策』（初版、一九六二年、再版、一九六八年、チュービンゲンおよびチューリッヒ）と相俟って、いまや、経済政策に使用すべき貨幣政策上および財政政策上のあらゆる

手段に関する理論と政策の全体的構成が示されているのである。なお、経済政策というものは、昨今至るところで甚だしく色褪せてしまったケインズ主義の幻想をもって近接しうるものでもなく、また形式主義的な考え方に基づくマネタリスト達の機械的な『貨幣数量説』によっても正鵠を期することができないものである。というのは、貨幣政策や財政政策はすべて人間の仕業であり、それが人間に影響をおよぼすのは当然であって、つまるところ、人間の行動が経済現象を規定するためである。

こう言った実際の判断と日本人の考え方との間には幾つかの共通点があると思われるが、とにかくそういう判断を下すのに役立つことがまた本書の狙いでもある。⁽¹⁾

一九八〇年秋

ギュンター・シュメルダース

(1) ギュンター・シュメルダース『経済生活の行動学』一九七八年 (Günter Schmolders, Verhaltensforschung im Wirtschaftsleben, Reinbek bei Hamburg, 1978.)

初版 日本版への序

ドイツの学界で好評をもって受け入れられた拙著『財政政策』が、このたび、日本の読者の間に紹介されることは、まことに喜びにたえない。国家および地方自治団体における財政政策上の決定や措置について解明しようとして、私が採用した方法は、『理解的』財政学（財政心理学）の方法である。人間間の、また社会心理的な諸関係を、このような感情移入の方法で『理解すること』は、日本の人々の精神的態度を考えると、日本の人々の間では、とくに認容されるのではないかと思われる。今日、国際的な、また超国家的な財政政策が、われわれの眼前で展開され始めているときにあたって、われわれ二大国民が解決しようと努めている経済問題や財政問題の領域において、相互の理解を深めることは、非常に有意義でありしかも必要なことではないであろうか。

それゆえ、拙著の日本版の刊行によって、日独両国間の文化上および科学上の関係が緊密なものとなり、さらに、現在および将来における重要事項を決定する場合、必要とされる相互間の理解の促進されることが、私の希望である。本書の翻訳ならびに日本版の刊行については、まず第一に、山口忠夫教授に感謝しなければならない。ケルン大学で生まれた、教授と私との間の親しい協力関係からして、私は教授が拙著のもっともよき理解者であることを確信するものである。

一九五七年四月十一日

原著第三版の序言

この度の改訂版も本書の基本思想を全く変えるものではない。この新版は第二版に比べると、概ねごく最近の事情を考慮しているが、その内容に関しては必要欠くべからざる個所についてだけ増補したにすぎない。それで、私は新しい側面を配慮しながらも本書の分量を増やさないようにするために、できるかぎり叙述を簡潔にするように努めた。

第二版の序言でその理由を述べたように、とくに適切と思われる若干の個所で、今まで以上に強く理論的側面を強調したつもりである。このような見地から、一部に非常に詳細な脚注が示されている。そこには、これらの問題をいっそう詳しく探求し易くさせるように、一連の文献がまとめられている。

今日流行している多くの教科書が公共財政の歴史や現代の財政政策上の諸制度の歴史的発展を軽視しているが、これは遺憾なことである。したがって、少なくとも主要部分においてはその都度、われわれの問題に関して従来与えられてきた以前の解決に対して読者の目を向けさせることが適當であると思われる。というのは、そこから、抽象的モデルが全く取り扱えない多くのことを学び取れるからである。

今回の改訂の場合にも、私は重ねて多くの激励や批判的論評または賛同的見解に拠り所を求めることができた。とくに題材全体を系統的にまとめあげるに当たっては、数知れぬゼミナールの開催、研究会およびシンポジウムに負う

ところが多かった。わがケルン大学財政学研究所はやがてその創設以来半世紀を経過しようとしているが、この研究所の活動から、新シリーズだけでも四〇巻以上におよぶ研究業績が生まれている。⁽¹⁾これらの研究調査もまた本書の中に十分活用されたのである。

なお、今回の改訂に際して誠実な協力を惜しまなかった商学士バート・リュループ (Bert Rürup) 君および研究所やゼミナールのすべての協力者諸君にとくに感謝するものである。

一九七〇年二月

ケルンにて

ギュンター・シュメルダース

(1) この点については参考文献。Finanzwissenschaftliche Forschung und Lehre an der Universität zu Köln 1927-1967, Berlin 1967.

原著第二版の序言

初版の序言で留意したことは、財政学における財政政策的側面を独立した題材および学問の領域として限定し、しかもこのことを正當に主張することであつた。それ以来十年の歲月が流れ去つたが、その間にこの新しい専門分野は文献や学説の中で驚くほど急速にかつ広範に押し広げられたために、第二版の發行についてはもはや弁明するの必要がなくなつたと思う。同時にまた、当時全集の特別の一巻として予告されていた『財政理論』が今日まで出版されなかつたという事情もはつきりしている。こういった理由から、この改訂版では、財政理論上の問題点を適當な章節において大幅に配慮した。そのため本書の分量もかなり増加したけれども、たとえそうなつたとしても、本書が読み難くなることのないようにしたつもりである。そこで、財政学上および財政政策上の点に關心を寄せる人は今や、最も重要な問題が論ぜられる場合、そこで理論と政策が結びつけられて扱われているのを見るであらう。したがつて、『貨幣政策』（チュービンゲンおよびチューリッヒ、一九六二年、第二版一九六八年）と本書を合わせて読むなら、そのときは經濟政策における貨幣政策上および財政政策上の用具の理論と政策の總合的敘述が示されることになる。そして、このことは単にアカデミックな講義に役立つだけでなく、同時に政策の実践にも有益なものとなるであらう。

今回の改訂は本書の基本思想をいささかも変更していない。しかし、内容に關しては、全編にわたつて新たに改訂が加えられている。このことはとくに財政調整に關する個所、『支出政策』の章全体について言えるし、また收入政

策の章に新たに挿入された公債政策の叙述についても言える。最終章は『財政政策の成果の基準』という総括的局面の下に改編された。

改訂の際、私は初版に対する多くの批判および各種の貴重な激励を抛り所とすることができた。なお、これらの批判や激励は学界ならびに実践的な政治の世界から寄せられたものである。さらに、私は財政学ゼミナールおよび財政学研究所における私の同僚と協力者が私のために与えられた多大の援助と協力に感謝しなければならない。とりわけ本書の仕上げと出版に当たって、骨身を惜しまぬ援助と助言を与えられた商学士コッホ(K. Koch)君に対して謝意を表したい。

一九六五年二月

ケルンにて

ギュンター・シュメルダース

原著第一版の序言

従来の財政学に欠けていたものは、財政政策上の決定や措置を左右している様々の力をはじめ、これらの力の政治的・心理的基礎、可能性および限界、ならびに、通貨および幣制、経済および社会、あるいは国民および国家におよぼすこれらの力の作用についての体系的な叙述である。本書によってこうした間隙をうめようと試みたわけであるがこの意味において、本書は、制度的な基礎および財政政策上の意志形成の原動力から出発して、さらに『議会以前の活動領域』から予算およびその監督にまでおよぶ。さらに、思考は流れて、財政調整、公共支出と収入および公債政策のもつ財政政策上の効果から、すべての財政政策の最終目標である『課税の術策』にいたり、最後に、景気対策としての財政措置と公共機関の『PR運動』の問題点を経て、さらに最近における国際的および超国家的な財政政策の発展過程にまで達するものである。

このようにまとまった思考過程から逸脱しないようにするために、本書では、別の立場や見解にもとづいてすでに解説されている多くの重要な関係事項については、わずかにその一端にふれるだけであったり、また問題を提起して示唆を与えるにとどまらざるをえなかった。さらに、これと同じ理由から、この百科全書中の一卷があてられている近代経済学的『財政理論』や『新しい経済学』の学説との間の対決的な議論については、もっとも必要なものだけに限定しなければならなかった。なお、この新しい経済学といわれるものは、ドイツ財政学の代弁者が通常意識してい

るよりも、はるかに強くドイツ財政学に特有の伝統的な認識上の共有財産によって支えられている、といつてよいものである。

以下に述べる叙述の構造および素材の扱い方は、ワグナーおよびシュモラー学派のもつ学界周知の学説や現実接近の方法に結びつけて行われた、大約二十五年間にわたるアカデミックな教授体験から生まれたものであると同時に、同じく十五年間にわたって物価・貨幣・および財政政策の根本問題に対して捧げてきた実践上の協力の賜でもある。ところで、もし、わがケルン大学の財政学研究所において利用しえたあの広範な研究成果がなかったなら、もちろん、ここに刊行するささやかな労作すら生まれなかったであろう。私の同僚ならびに協力者に対し、ここに重ねて謝意を表さなければならぬことを痛感する次第である。とくにクレースゲス嬢 (Fr. Dr. E. Klösges) からは、本書の仕上げならびに出版にあたって、終始、骨身を惜しまぬ御援助をいただいた。また、本全書の出版責任者、プライザー教授 (Prof. Dr. E. Preiser) から寄せられた多くの貴重な助言に対しても、心から感謝しなければならない。

一九五五年五月二十五日

ケルンにて

ギュンター・シュメルダース

解 説

一

原著者ギュンター・シュメルダース (Günter Schmolders) 教授は一九〇三年九月二十九日、法律家を父としてベルリンに生まれ、一九一八年の十一月革命やそれにつづくあの大インフレーションを目の当たりに見ながら成人した。学生時代に彼に影響を与えた人々としては、ハインリッヒ・ヘルクナー、ルートヴィッヒ・ベルンハルト、ヘルベルト・フォン・ベッケラート (Heinrich Herkner, Ludwig Bernhard, Herbert von Beckerath) などを挙げることができる。これらの人々によって培われたものは、歴史学派のシュモラーやワグナーの伝統をついでベルリンでなお強い生命力をもちつづけていた研究態度、現実接近するという精神であった。教授の所説が理論的であるとともに、すぐれて実践的な力をもっている理由は、青年時代にこのような雰囲気の中で育まれたためであろう。なお後に、イギリス、フランス、アメリカ合衆国およびスカンディナヴィア諸国にしばしば遊学して各地の実際を見聞したこともまた、教授の実践的な、現実接近の態度をさらにいっそう強めたにちがいない。

教授の学問上の最初の業績は、この精神にふさわしく、当時多くの国々で激しく論議されていた政治的・社会学的問題、すなわち、飲酒の禁止をめぐる諸問題に関するものであった (Prohibition im Norden, Berlin 1926. Prohibition in den Vereinigten Staaten, Leipzig 1930)。教授がこの問題を考察しているうちに教えられたことは、アルコールの

禁止がしばしば試みられたにもかかわらず、一度も成功したことがないという歴史上の教訓についてである。この歴史は、人間の消費慣習がいかに根強い持続性をもったものであるかを示すばかりでなく、国家の干渉活動の限界がどこにあるかを教えるものでもあった。ともあれ、教授は、アルコール禁止問題について深く研究しているうちに、議会の表舞台や楽屋裏において力強く作用している政治的・心理的な原動力に注目し、その原動力のはたらきについてつぶさに知ることができたのである。この研究によって、教授は政治的・心理的方法を十分身につけることができたのであるが、さらに進んで、この方法を租税問題、為替および貨幣信用問題の領域にも適用していった。このようにして、一九三一年ベルリン大学において経済的国家学に関する教職の資格を取得し、さらに研究をつづけて、その考察の範囲を国際的な経済・および財政問題、海外における貨幣・および景気政策上の経験、そして世界経済恐慌等の諸問題にまで拡げていったのである（Die Erragsfähigkeit der Getränkesteuern, Jena 1932. Frankreichs Aufstieg zur Weltkapitalmacht, Berlin 1933. Die Konjunkturpolitik der Vereinigten Staaten, Leipzig 1934. Geld und Kredit, Leipzig 1938.）。

大学教授としての活躍を見ると、シュメルダース教授は、一九二六年から一九三一年までベルリン大学講師をつとめたのち、一九三四年ブレスラウ（Breslau）大学に招かれた。ちなみにブレスラウは、東洋研究家であった祖父アウグスト・シュメルダース（August Schmolders）教授もかつて住んでいた町であるが、現在はポーランド領（ウロツワフ Wroclaw 市）になっている。この時期における教授の主な関心事は、東方問題であり、また広域秩序に関するものであった。このときまた、価格政策および競争秩序に関する実践的な経済・および通貨政策上の課題について、協力する機会が与えられたのである（Der Wettbewerb als Mittel volkswirtschaftlicher Leistungssteigerung und Leistungsauslese, Berlin 1942.）。そして、一九四〇年には財政学教授としてケルン（Köln）大学に招聘された。同大学は、一九二六年に

ドイツではじめて財政学正教授の地位 (finanzwissenschaftliches Ordinariat) が設けられ、フリッツ・カール・マン (Fritz Karl Mann, 1883. 12. 10—1979. 9. 14) がそれに就任した。由緒深いところである。教授はそれ以来、財政学の講座を担当するかたわら、財政学研究所 (Finanzwissenschaftliches Forschungsinstitut) と経験社会経済学研究所 (Forschungsstelle für empirische Sozialökonomik 一九五七年設立) を主宰して、財政政策、貨幣政策などの諸問題について、活潑な研究を続けてきた (Allgemeine Steuerlehre, Wien-Stuttgart 1951, 4. Aufl. 1965, Finanzpolitik, Berlin-Göttingen-Heidelberg 1955, 3. Aufl. 1970, Konjunkturen und Krisen, Hamburg 1955, Neuauf. 1972, Die Politiker und die Währung, Frankfurt 1959, Geschichte der Volkswirtschaftslehre, Wiesbaden 1961, Geldpolitik, Tübingen u. Zürich 1962, 2. Aufl. 1968)。

上記二つの研究所を中心とする研究活動を通じて、教授の門下から数多くの俊秀が輩出し、現にそれぞれ一家をなして、西ドイツの内外でめざましい活躍を示していることも、看過することのできない事実である。それらの人々のうち、ここでは、C・A・アンドレ (Clemens August Andreae インスブルック大学Ⅱオーストリア)、K・H・ハンスマイヤー (Karl-Heinrich Hansmeyer ナルン大学)、G・ベットカムプ (Günter Hedtkamp ミュンヘン大学)、K・マックシャイト (Klaus Mackscheidt ナルン大学)、G・シェアホーン (Gerhard Scherhorn ハンブルク経済・政治アカデミー)、B・シュトリウムベル (Burkhard Strümpel ミシガン大学Ⅱ米国) および H・ツィムマーマン (Horst Zimmermann マールブルク大学) の諸教授だけをあげておこう。

シュメルダース教授は一九七一年にケルン大学を退いて名誉教授となり、以後ミュンヘンに居を移して個人事務所を開設し、そこに拠って研究に、著作に、講演にと、現役時代と同じように、西ドイツの内外にわたって積極的な活躍をつづけている。これまでに教授が著した学術書は七十冊を超え、論文の数は三百をはるかにすぎている、それ

らは英語、フランス語から韓国語、日本語まで十数カ国語に翻訳されている。これによって教授の研究活動の旺盛さと、教授の学問の影響力の大きさが窺われるであろう。

この間一九五三年には、欧州石炭鉄鋼共同体の発足にあたって独仏両国間に『租税紛争』が発生し、それを解決するためにいわゆる『ティンベルヘン委員会』が設けられたことは本文中にも述べられているが、教授はこの委員会で唯一人のドイツ人としてめざましい働きぶりを示した。それ以来、教授の国際的活躍には瞠目すべきものがある。他方、国内の分野では、一九五〇年以来連邦大蔵省学者顧問団のメンバーとして重きをなしており、とくに同国の売上税問題の解決に大きな貢献をして、『西ドイツ附加価値税の生みの父』と言われているなど、戦後の西ドイツの財政政策の実践的側面に対しても重要な影響を与えたのである。

また一九五九年以来、第二次世界大戦後マインツに創立された『科学・文芸アカデミー』(Akademie der Wissenschaft und der Literatur)の会員に推され、また一九六五―六六年にはケルン大学総長に選出された。さらに一九六八年にはインスブルック(Innsbruck)大学(オーストリア)から、そして一九七三年にはヘント(Gent)大学(ベルギー)から、それぞれ名誉博士の称号を授与されたのである。

二

一 シュメルダース教授は、本書『財政政策』において、一体どのような問題を取りあげ、また、これらの問題をどのように考察しているのか。これに答えるために、まず本書にあらわれている教授の意図と、それから、本書の特色と考えられる点について、概括的に説明しておきたい。

教授によれば、財政学は科学的財政政策学である。本書の初版では、財政政策学は応用財政学または実践的財政学